いろはにほへど、こいならず

能美夜澄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いろはにほへど、こいならず

【Ｎコード】
Ｎ３８４６Ｚ

【作者名】
能美夜澄

【あらすじ】
愛するモノと繋がった時、人は真なる力を発揮する
友情と青春の熱血学園フェティシズムバトル！
の予定

◇1

『個性』という言葉は酷く都合がいい。

世間一般においてどんなに受け入れがたい性格も、性質も、性癖も、『個性』なんて言葉1つでまかり通ってしまうのだから。

世話好き、意地っ張り。謙虚でも豪快でも。活動的でも退廃的でも大いにけっこう。歳上好きであろうが人ではなく衣服、制服や装飾品に劣情を抱こうが別にいい。

度を越してさえいなければ。

現代に於いは、アクが少ない、平均的な人間が多数を占めているからこそ、私に耐性ができていないのかもしれない。

我が国の教育が天才を生み出すための専門化されたものではなく、平均的な秀才を生み出すためのモノなのだ。

その中にあっても薄まらない『毒』を持った存在に抵抗を覚えるのも、私に限ったことではないだろう。

断じて私は短気などではない。そこばかりは始めに主張しておかねばなるまい。

未だに学徒の身に在っては、人間できてないこともあるやもしれぬ。だが人並み以上の忍耐力を培ってきたつもりである。

長々と前の口上を述べさせてもらったが、私が謂いたいのはつまり

「いろはッ、頼む！　今日もお前のムレタ靴下を嗅がせてくれ！」

私の幼なじみは救いようのない変態である、ということだ

そんなことをのたまいながら、不肖の幼馴染みが神聖なる碧清学園中等部付属図書室に飛び込んでくる。

学年どころか高等部とは校舎が違うはずなのになぜ居る。

「頼むよ。ホラッ、目の前のヒーターのおかげでいい感じになってるし早く靴をぬいデグァ」

コイツが馬鹿なことを言い切る前に後ろからアタマに蹴りが入れられる。いつものことながら大丈夫なのか。そして飛んできた唾をすかさず本でガード。すまない赤川先生。

「いい加減図書室内での大きな奇声を上げながらの奇行は控えてもらえないですか、亜執センパイ」

そうクールに言い放つ黒髪ロングは蔵柿愛架。この図書室の主にして冷血無慈な図書委員のオサ。

無類の本好きにして私の同級生。

それに相対するは、我が幼馴染みにして碧清学院高等部に在籍する生きる伝説（変態的な意味で）。

怯むことなく亜執晴二は無意味に澄んだ瞳を輝かせ。

「つまり、図書委員として騒ぎを見過ごせないと」

何故かタメをつくり。

「なら、静かにしてさえいれば」

胸を張り自らになんら恥じることなどないように。

「変態行為をしてもいいんだよな?！　さぁいろは！　オレにその可憐にしてその実ワガママなかほりのおみ足をゲボァ」

いい終わる前にセージにエルボーを叩き込む。ワガママなかほりってなんだよ。私は普通の体臭だ。

そして、これ以上騒ぎが大きくならない内に図書室から引きずり出すべくセージの肩に力を籠めて引く、が重い。無駄にデカイ図体をしおって。

「イヤ、いろはが小さいだけだロリャ！」

そうか、まだ息があったか。もう少し痛めつけねば。

「……これ、へんきゃくおねがいします」

蔵柿女史に本の返却を依頼するのも忘れない。喉が乾燥してたから少しヘンになっていまったが。裏返ってなんてないな。

何故か驚いたかのような女史に本を押し付け、セージを引っ張りながら去る私。コイツには帰り道でたっぷりお仕置きをしなければ。

「いろはさんって喋れるのね。同じクラスでも初めて聴いたかも……」

未だに衝撃が抜けないでいる。あんなにクラスでは大人しいいろはさんが、顔を真っ赤にしたり殴ったりするなんて。

「でも、とってもかわいい声。彼女なら、すごく愉しめそうね……」

蔵柿愛架は白かった筈の頬を残るところなく染めあげ、舌なめずりしながら妄想を膨らませる。唇からチロリと覗いた舌は、ゾッとする程に紅かった。

◇2

説明しよう。碧清＜ヘキセイ＞学園は初等部、中等部、高等部、果ては大学まで備えた超マンモス校なのだ。

場所は地方の山奥に位置し、生徒は親元を離れ寮住まいを強いられてしまう。

学園からの外出は週末のみ。申請制となっており門限もけっこう厳しい。

生徒達は永く訪れる待ち受ける灰色の学園生活を、悶々ムラムラと過ごさなければならない……と思いきや。

広大な学園の敷地内には商店街、バッティングセンター、プールに温泉、プラネタリウムまで完備してある。

そして我が高等部の校舎の裏にはその下で告白してＯＫを貰えた男女は結ばれると言う伝説の柿の木なんてシロモノも存在する。

青春の謳歌ってヤツがしたいキミは碧清学園に来ようぜ！ってなんだよいろは。そのジト目は」

何なんだコイツは。突然宙に向かって学園の紹介など始めおって。それに柿の木の説明なんて伝説でもなんでもないだろ。

もしやさっきのエルボーが脳に深刻なダメージを与えてしまったのか。元が救いようがない変態であったとしても責任は感じてしまう。

仕方ないな。セージにちょっと目配せする。

「なんだ、しゃがんで欲しいのか。ホラ……って、なんで俺のアタマを撫でるんだ？そんな慈しむような瞳で　」

ここまでアタマが残念になっては仕方がない。いやいやながら、本当に遠慮したいのだが、これからは私がセージの世話をしてやるしか……。

現在図書室のあった中等部の玄関を出たところなのだが、突然騒音が聞こえてきた。

どうやら発生源は、隣にある高等部の裏側のようで、煙やら爆発やらが起こっているようだ。

気にはなる。私の野次馬根性に火が点きつつある、が。それ以上のスピードで隣のバカはクライマックスに達したようだ。ウズウズと今にも飛び出しそうである。

セージに現場を観に行こうという意を伝えようとした矢先。

「落ちないようにしっかり掴まってろよ、いろは！！」

突然抱き抱えられた。Ｗｈａｔ' ｓ？　なにこれ。確かに私のカラダはセージが軽々と持てるくらいちっちゃいけどだからと言っていきなり抱き着くのは駄目だししかもお姫様抱っこで公衆の面前を駆け抜けるなんて恥ずかしくてこれ以上顔をあげてられないからセージの胸に顔を押し当てるそう顔さえ見えていなきゃバレないよねそして落ちないようにしっかり掴まれっていったのはセージだしも

っと顔を埋めなきゃ匂いが嗅げないしセージの匂いは落ち着くからこの非常自体にはうってつけだから私の行動はなんらおかしいところはなく冷静に状況に対処しているはずもっといっぱいすわなきゃセージのにおいカラダのナカいっぱいに染み込むくらいまでもうにおいが染み着いちゃっていつでもセージのが感じられるくらいに……。

「着いたぞいろは。というか大丈夫か？顔真っ赤だぞ？」

どうやら必死にしがみついている内に酸欠になったらしい。

なにやら変なことを考えていたようだが酸欠のせいに違いないな。

恐るべし、酸欠。

◇3

なんの問題もなく高等部の裏側に辿り着いた私とセージ。

本当になにもなかった。なにもなかったのだ！勘違い無きように。

そこに待ち受けていたのは冬の季節のために枯れた伝説の渋柿と、その根元の雪から生えている何十本もの脚だった。

実にシュールな光景だ。

学園が居を構えるのは地方の山奥だから人が埋もれるくらいには雪が積もってる。それはいい。

だからと云って雪の中から大量の脚が生えるという光景はおかしい、はずなのだが。

セージが雪から芽生え、収穫を待つ脚どもを慣れた手つきで引っこ抜いていく。毎度毎度わざわざご苦労なことだ。

今日は女子生徒は埋まっていないようだし任せてもよいだろう。

ここに埋まっているのは青春の燃えカス。

学園のアイドル、とやらに当たって砕けた夢狩人達だ。

一般生徒は学園のアイドルの表の貌しか知らないから未だに告白の列は絶えない。

だが、もし彼女のアレが知られたら……、逆にファンが増えるかも

しれないか。

この場所はセージの謎語りで触れられたように、告白スポットとして学園生に広く知られている。

不肖わたくしめもこの場所で告白を受けたことはある。あるのだが、全て断った。

告白をしてきた連中は私の容姿にのみ惹かれた輩であって、皆残らず変態臭がしていたし。

自らの容姿に対してそんな評価を下すのも忌々しいが、最低限の自覚は持ち合わせている。

そんな虚しい思索に耽っているうちにセージが収穫を終えたようだ。被害者達は当分目を醒まさないと思われるほどにノビてしまっている。

男のクセに情けない、とは云えない。

彼女のチカラを身を以て知る私には。

いくら告白を断るためとは云えここまでやることはないはずだ。旧くからの友として少しお灸を据えるのも悪くない。

久しぶりの実戦の気配に血がたぎるのを感じる。最初は嫌だったのに、今でもまだ受け入れないのに、カラダの疼きは止められない。

それに、雪の上に彼女のとあるモノを見つけた。《個性的》な彼女の力の源。

これを大勢の前で暴露すれば、世間に紛れた《普遍的》な彼女の全てを抹殺できる恐るべき兵器。

もしそれをやったら、御返しとばかりに私の秘密を遍く世間に公開されるだろうからできないけれど。

行き倒れている奴らの額に落書きをしているセージの袖を引っ張り、耳を貸してもらいこれからの行動を伝える。

しかし、事を荒立てるとなると、私も『本気』を出さねばならないだろう。

そのための準備としてセージの悦ぶ顔を見るのは癪だが仕方がない。

なんどやっても慣れはしないが、ソレが私に科せられた使命なのだから恥ずかしかろうが何だろうがやり遂げてみせる。

今回こそは暴走しないようにしなくては。

「俺としては暴走してたほうが楽しめるんけどな」

黙れ変態。

まぁ、とりあえず、今やることは。

「アイツに忘れもの、届けにいこう　」

◇4

私とセージは幼馴染みである。

モノゴコロつく前からの関係だった、らしい。詳しい出会いのキッカケについては私は知らない。

そして、私に自我が生まれると、そのときには既に、アイツは私の前で笑っていた。

歳上ということで、なにかと私を気遣うなど、兄のように接してくれた。それに対して素直に私は甘えていた。

今でもそれは変わらないのかもしれないけれど。

この頃は変な性癖も無かった筈だ。

私に両親はなく、祖父に育てられた。

祖父は立派な人物であった。

自らをだんでぃ、且つ、ろまんすぐれー、を体現したちょい悪のオジサマ、と称する変わり者であったが、自慢の祖父に違いはなかった。

私の人格形成にもっとも影響を与えた人物であろう。

いろいろな意味で。

セージも深く慕っており、なにやら隠れて祖父に師事をされていた

ようだ。

そんな謎めいた修行を行う彼らに私が近づこうとすると、何故か必ず遠ざけられた。

その度に、『いろはにはもうできていることだから』と、頭を撫でられて誤魔化されてしまったものだ。

当時の私は両親がいないことを引け目に思っており、内向的になっていた。

そんな私を引っ張り、常に導いてくれていたのがセージであり、そのセージに勝っている部分があるとすれば、誇らしい気持ちにもなる。

その内容を知るまでは、そう思っていた。

誰もいない筈の屋敷になにかが蠢くオトがしたから。

こっそりと。様子を見に行ったんだ。

閉じられた襖、音を立てないようにそっと開ける。

今ここに居ない筈の、いつもとは違ってみえる二人の背に、静かに忍び寄る。

彼らは貪るように、ただ夢中で私の■■を▲▲していた。

喉が鳴った。

その光景は、本来なら、普通のこどもが見たのなら深いトラウマになったかもしれない。でも

唾が湧き出る。止まらない。

自分の祖父が、兄のように慕った少年が、よりにもよって自分の衣服、よりにもよって■■を▲▲しているなんて狂ってる。はずなのに心臓がガンガンと脈打つ。内蔵がひっくり返りそうになるほどの緊張、心地よい。

でも、そんな光景を視て。

汗の雫が畳に落ちる。落ちる。落ちる。

畳に汗が泉が溜まっていく。そこに映し出された私の顔は。

二人に嫌悪を抱くどころか。

頬の筋肉がつり上がる。そして嘲う。

そんな表情なんてしたくないはずのに。二人の奇行に、怖くて、震えていなければならない筈なのに。

どうしようもないほどに。

私の■■を▲▲したまま惚けたカオをしてるセージ。見ているとカラダの芯が熱くじんじん疼いくる。もっとセージを悦ばせたい。自分より年下の、ちっちゃい女の子の■■を▲▲して惚けきった気持ちの悪い顔を私自身の手でもっと蕩けさせたい。もし今穿いている

■■を遣ったら、これなら今セージも悦んでくれるはずだからそうしたら私も嬉しくなって一緒に愉しめるはずだからもっと、もっと、もっと。

愛しく感じた。感じて、しまった。

その日、私は、群絹（むれきぬ）いろはは、この血に宿る力に覚醒した。

◇5

力が覚醒した、と云っても、スプーンを念で曲げれるわけでも、遠くの物を瞬間移動させられるわけではない。

ましてや、変身してセクシーなぼんっきゅっぼんの大人の女性になれるわけでも断じてない。別に残念ではないが。

なにができるか。それは、身体能力の向上。ただ、それだけ。

発動条件は……、私のカラダのにおいを大切だと思ってる人に嗅がせること。

そうすれば、私の中にあるスイッチが切り替わる。

実際はただ嗅がせることで発動するわけではない。嗅がせた人間の反応をみることによって条件が満たされる。

相手が嫌悪しようが、愉悦の表情を浮かべようがカンケイなくて、勝手にカラダが昂ぶり始めてしまう。

変態だ。

なんの弁解も、少しの否定もできないほどに、救い様のない天性の変態だ。

特にムレてにおいのキツくなった脚を、相手の鼻頭に押し付けて見下すことが。

小さくて色気なんかちっともない自分が、自分よりも大きい相手を

チカラでねじ伏せることに、抑えきれないくらいにアツくなる。
嫌だと、抗おうとしても無意味で。
カラダ中が燃え尽きそうな程に火照って。
昏い衝動にカンカク全てを支配されて。
理性は砕け散り、溢れ出した本能のままに暴走する。
虚弱な細腕からは岩をも砕く怪力を。
華奢な足腰は強化され誰であろうと逃しはしない。
いろはイヤーは地獄耳にして
いろはアイは千里眼。
五感の強化、遮断も思うがままで、限界まで発揮すれば四方千里は索敵可能。
……あんまり強化したら全身がくすぐったくなるから嫌だけれど。
胸を満たすのは極限にまで増幅された独占欲。
普段は抑圧され、表に出すことはない、秘めた想い。
後ろめたい感情が爆発的に増殖し、リセイによる制御を完全に破壊する。
その結果、どうなるかと言えば覚醒のトリガーとなった者で、主にセージのことをだが、意識のほとんどが占められてしまう。
つまり、『ＳＥＩＪＩにこんな街中で私のにおいを嗅がせてるな

んて、アタマの中がフットーしそうだよおっっ！』

なんて少女マンガみたいな状態になってしまう。正直ばかばかしい。でも、そんなばかばかしくて、フットーしそうなのがたまらなく……、きもちいい。

そして、チカラを奮わなければならない原因を排除した後に、日常へとスイッチ戻す方法は私自身がココロの底から満足をすること。その度にセージにはいつも酷いことをしてしまってる。恥ずかしいから絶対に謝れないけど！

幼い日々にセージが祖父にへんたい行為の修行をつけられていたのは、私のパートナーになるためだったらしい。

異能の血が流れる者同士はお互い引かれ合う。そして私たちは反発し合うのが常であり、避けられない宿命。

セージは幸いにも１０年に一人の適性の持ち主だったらしく、今現在では平時でも変態キャラを演じることができるほどだ。

生粋の変態である私の隠れ蓑になって

有事の際は、私のチカラを開くカギとなって、一緒に立ち向かってくれる頼りになる相棒だ。

たまに演技なんじゃなく本気なんじゃないか……、とか思うけど気のせいだ。

絶対に気のせいに決まってる！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3846z/

いろはにほへど、こいならず

2011年12月16日00時54分発行